

## 桃の薬剤摘果に関する研究 (第1報) 開花期の散布薬剤について

宮崎政善・緒方俊雄・今永徳明  
(大分県農業試験場)

MIYAZAKI, M., OGATA, T. and IMANAGA, N.  
Studies on the Chemicals for Thinning Peaches  
(I) On the chemicals in full bloom

桃は収穫果に対して着果数が多く、果実の発育期間が短かいので薬剤による早期摘果の有効な果樹と思われるが、葉に葉害が出やすく、生理的落果等の関係で薬剤の選択がむつかしい。そこで、未だ展葉をみない開花期に散布し、早期摘果効果と予備摘果の省略を目標に適当な摘果剤を探す目的で、1961年から試験を行ったのでその結果を報告する。

### 1. 薬剤の種類と摘果効果

大久保7年生樹3本を供試し、1処理5本の側枝を選び同日開花した花のみに人工授粉を行い、開花後の経過日数をかえてコロマイト0.02, 0.04%, NAA 50, 100ppmおよびピーチシン50, 100, 200, 400ppmを散布した結果第1図の通りで、馬場白桃にNAAとピーチシンを散布した結果も同じ傾向を示した。また、開花3, 5, 10日後の花についても同様の傾向を示した。すなわち、コロマイトおよびNAAは早期の落果が少なく摘果効果が劣った。ピーチシンの効果は高かったが400ppmでは葉に葉害が出た。1962年同じ方法で大久保、中津白桃(他家授粉)8年生樹にピーチシン50, 200ppmとドルマント0.04, 0.08%を散布した結果、両薬剤とも効果があり、とくにピーチシンは早期摘果の効果が高く5月に入ってから落果が少ない。しかし、ドルマントの開花10日後散布では葉に葉害を生じた。

開花後の経過日数では10日後の花までいずれも効果があり、とくに3日後の花は薬剤、

濃度に関係なく落果が多かった。このことは桃の受精と関係があるものと思われる。

### 2. DNBP剤ドルマントの摘果効果

1962年に大久保13年生樹2本を供試し、1処理5本の側枝にドルマント(36.0%) 0.04, 0.08%を満開(80%開花)日に散布した結果は第1表の通りで、予備摘果程度をいくぶん越えたが摘果効果が高かった。白鳳8年生樹においても効果が高かった。

1963年に大久保9年生樹3本の主枝を単位に1樹に3処理を入れ、0.04%を満開2日後に、0.08%を3日後に散布し中庸の長果枝について調査した結果、0.08%では葉害が甚しく、散布後1週間には芽の殆んどが枯死し、満開後20日には殆んど落果した。0.04%でも満開後20日において3コ以上結果している枝が半数に達しなく、非結果枝が28.1%あった。

また、第2表は大和早生9年生樹2本の側枝5本を1処理として、表の濃度を満開2日後(4月14日)、4日後、6日後に散布した結果で、それによると葉害は濃度が高いほど激しいが散布日による差が大きい。すなわち、4月16日散布はいずれの濃度も実害を認め、その他の散布日には0.06%以下の濃度では実害を認めなかった。このことは散布日およびその前後の天候が関係するものと思われる。散布前の降雨が葉害と深い関係をもつと思われる。

### 3. ピーチシンの摘果効果

1962年に大久保13年生樹2本を供試し、1処理5本の側枝にピーチシン(16.0%) 50, 200ppmを満開期、2日後、5日後に散布した結果は第2図の通りで、濃度が高いほど、散布時期がおそいほど早期の落果が多く、その後の落果が少なかった。なお、展着剤ソルボンT20, 1.2cc/lを加えると摘果効果を増し200ppmでは落ちすぎた。また、散布時期がおそいほど残存果が基部に片寄る傾向があった。これは結果枝上の開花順序が、一般に結果枝の上部から中央部が早く開花し、下部がおそく、最下部が最もおそく開花することから、ピーチシンの開花後の経過日数による摘果効果の差異に起因するものと思われる。

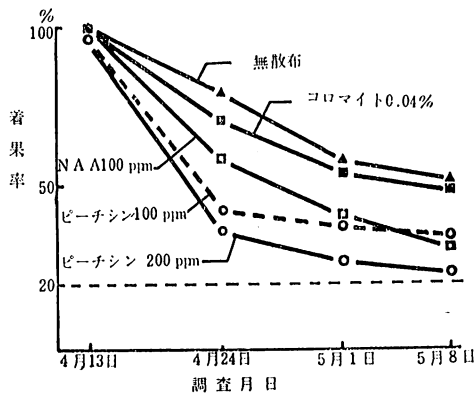
1963年に大久保9年生樹2本、14年生樹1本の主枝、亜主枝を単位に200ppmを満開3日後、5日後に散布し中庸の長果枝について調査した結果は第3表の通りで、14年生樹では摘果程度が適当であつたが9年生樹では落ちすぎで、樹による差が大きい。なお、満

開期は9年生樹が2～3日早く、散布前日がたまたま雨であったが、これに起因するかどうかは判然としない。また、ピーチシンは開花当日から11日後の花について摘果効果があり（第3図）12～13日経過した花にはむしろ着果促進的であった。このためか満開5日後散布の残存果は枝間、結果枝上の分布において良好であった。

総括

以上の結果を総括するとピーチシンおよびドルマントは早期摘果の効果が高く、開花期の摘果剤としての可能性がある。しかし、ドルマントは濃度、散布前後の天候によつては実害の恐れがあるので0.04%以下の濃度で天候との関係を適確につかむ必要がある。ピー

第1図 開花2日後の花に対する摘果効果（1961）  
（大久保）



第2表 濃度及び散布日と萌芽した芽の枯死芽率

濃度	散布日	4月14日	4月16日	4月18日	平均
0.04%		2.1%	15.6%	7.1%	7.4%
0.06%		3.3	34.8	2.9	16.2
0.08%		22.6	31.8	8.6	18.0
0.10%		20.6	76.0	12.9	28.2
0.12%		55.0	84.4	17.8	45.9
気温(9時)と日照		16.9° 1.6h	16.7° 8.4h	20.8° 7.8h	
散布時期		13時50分	10時40分	9時30分	
前日の雨量		5.4 (終日小雨)	21.4 (終日雨)	晴	

チシンは葉害がなく、満開後20日以後の落果が少なく摘果剤として優れているが、樹によつて摘果効果に差があるのでその要因についてなお検討を要する。

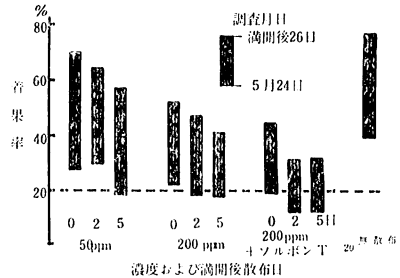
第1表 ドルマントの摘果効果（大久保） set%

区名	調査日	着花数	満開後20日	26日	40日頃
0.04%		206	67.9%	59.7%	15.5%
0.08%		234	68.8	47.8	14.1
無散布		433	82.4	76.7	39.1

第3表 摘果程度と残存果の分布（満開後30日）

調査項目	3ヶ以上結果せる枝		非結果枝		1結果枝平均果数	
	9	14	9	14	9	14
満開3日後	6.7%	59.1%	75.0%	27.3%	0.5	4.2
満開5日後	0	52.0	80.0	0	0.2	4.4
無散布	100.0	100.0	0	0	8.3	10.5

第2図 ピーチシンの摘果効果（1961）（大久保）



第3図 散布日までの開花後の経過日数と着果率（1963）  
（大久保）

